

〔漆の工芸展によせて〕

秋草文様木地蒔絵茶入について

総高8.8cm、径7.3cm、の円筒形の器で、本来の蓋は失われています。現在は後補の木製蓋をつけて茶入と称していますが、本来の用途はわかりません。

この器で特筆すべき点は、第一に木地が桐材であること、第二には木地を曲物として成形している点であります。近頃はアメリカでも桐の栽培が行われ、筆筒その他の用材として相当量が日本に輸入されていますが、元来桐は中国大陸の原産であります。日本には早く伝わり、好んで栽培され、珍重されてきました。その好まれた点は、木質が他の用材に比較して非常に軽く手ざわりがやわらかであること、また容易に亀裂が生じないばかりか、狂いがこないと板目も柃目もたいへん美しいこと、また吸湿性が非常に乏しいにも拘らず、驚くほど耐火性が強いことなどがあります。こういう珍しい特質から桐材は好んで筆筒・長持等の家具類はもちろんのこと、琴の如き楽器から金庫内部の扉・抽出、日本固有の履物である下駄に至るまで愛用されてきました。強いて欠点を挙げると虫害に弱いことと弾性に乏しい点位であります。従って桐の曲物の実例が甚だ乏しいのは技法的に困難なことが第一の原因と考えるとよいでしょう。この器などは私の知る限りでは最も古い桐の曲物の例であります。

ここに描かれている秋草は菊、萩、桔梗、撫子、藤袴、薄、女郎花の七種であります。いずれも桐の木地全体に透明漆を塗ってから平蒔絵の手法で表わしたもので、絵様はいかにも絵画的な素直なものであります。露を表わすために嵌入了銀の丸い粒が、やや脱落した痕跡はありますが、今でも15箇残っています。底は桐の柃板を嵌めこんだものであります。底面にも僅かながら木地に菊花の蒔絵が磨滅をまぬかれて残っていま

す。当初はたっぷり蒔絵の草花で飾られていたものでありましょう。かなり損傷があったため内部は全部補強されていますが、小品ながら桃山蒔絵の特色のよく窺われる美作であります。

因に近世の木地蒔絵と称される技法は、まず木地を汚さぬために、木地の全表面を錫の薄板（錫金貝すずかながいと）で二重に蔽いかぶせ、つぎに下図を描いた薄い和紙を貼ります。そうして下図の輪郭を鋭利な刃物を使って、木地をきずつけぬように、錫の薄板を切りはがします。このようにして下図の輪郭の部分だけ木地を露出させておいてから、好みの手法で蒔絵を施すのが通例であります。しかし昔の手法は木地全体に透明漆を塗ってから、宛も絵をかくように金・銀粉で文様を蒔絵したと想像されます。

大和文華館所蔵品の中に室町時代の作品で「禅機図木地銀蒔絵経箱」というのがありますが、これも箱の全表面を透明漆を塗ってから銀粉で箱の五面に禅機図を蒔絵にしたものであります。(石澤正男)

秋草文様木地蒔絵茶入(桃山)

